

# 京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所  
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入  
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

## 第 31 回社会福祉研究交流集会 in 京都のご案内

\*\*\*\*\*

31 回目となる今年の研究交流集会は、古都・京都で開催します！  
福祉現場の実践、研究、そして運動、それぞれ現場で積み重ねてきた経験や悩み、問いを持ち寄り、立場や分野をこえ、対話と交流を通して、「これからの社会福祉」をともに考えていきたいと思えます。詳細については、順次ご案内いたします。

日時：2026 年 8 月 29 日 (土) 13 時

~ 30 日 (日) 15 時

場所：大谷大学 地下鉄「北大路」駅から徒歩

1 日目のプログラム終了後、懇親会も予定しています！

〈主催・問合せ〉総合社会福祉研究所

TEL06-6779-4894 E-mail : [mail@sosyaken.jp](mailto:mail@sosyaken.jp)

# 自分のペースで、 自分らしくいられる居場所を ～たんぽぽ学童保育所～



大阪市西淀川区にある、たんぽぽ学童保育所。2026年2月現在で、1年生から6年生までの14名（面積定員は20名）の子どもたちが放課後の居場所として利用しています。うかがったこの日は、バレンタインデーの数日前。女の子たちはチョコづくりをする予定で、「ただいまー！」と元気に学校から帰ってきました。3年生がレシピの本を見ながら、子どもたちだけで準備開始！ 1年生も、包丁を上手にを使ってチョコレートを刻みます。



たんぼ学童保育所では、少人数であることを活かし、手作りのおやつづくりにも力を入れています。指導員の森岡恵治もりおか けいじさんは、「子どもたちがやりたいことをできるだけかたちにできればと思っています、おやつも子どもたちのリクエストを聞いたり、本やYouTubeで探してきたものを一緒につくったりしています」と話されます。



チョコづくりの横で、1年生の男の子はおやつづくり。白ごはんをスプーンで天板に薄く広げ、電子レンジでチンし、油で揚げるとカリッカリのせんべいに！味付けも自分で考え、上手に広げて、電子レンジも自分で操作します。もちろん指導員がそばで見守っていますが、指示することは決してなく、絶妙な声かけです。



高学年が帰ってくると、おやつにみんなで手づくりせんべいを食べました。お兄ちゃんお姉ちゃんの「おいしいわ〜！」に、いっしょけんめい作った1年生の男の子もとてもうれしそうです。その日そのときの気分で、やりたいことに、自分のペースでチャレンジできる。子どもにとってはとても大切なことですが、いまの社会のなかでそのことがどれだけ保障されているか、それぞれのペースで楽しそうに過ごす子どもたちの姿に考えさせられました。

(写真・文 申 佳弥)

※たんぼ学童の活動は、トピックスでも紹介しています。

## 【ひろばトーク】

海を守ることは、人を守ること

武本 匡弘 6

### ●特集●福祉のしごとに就くみなさんへ

先輩職員からのメッセージ

10

佐々木楓／柳田美和／野崎聖悠／松井深温／  
澁谷 鮎／野口琴美／細井 大

一人ひとりが自分らしく、ゆたかに生きられる社会へ

足立 早苗 24

みんなのじんけんをまもるために

加藤 望 26

自分に何ができるか、模索が続いています

鵜飼 健史 30

### ●トピックス●

アースウォーカーズの挑戦

小玉 直也 34

制度の先に「人」を見る——台湾と日本の交流から

黄 驥 38

日本三大寄せ場の一つ、横浜・寿地区を訪ねて

朴 仁淑 42

もっとグラビア

子どもたちの生活をいっしょにつくっていく

申 佳弥 46

### ●連載●

★新連載★『福祉のひろば』とわたし

研究所創設のころ

石倉 康次 52

★新連載★政治を見る目

第1回 政治を見る目を鍛えよう

長澤 高明 54

★新連載★世界と交流する平和の船に乗ってみた！（南半球編）

第1回 タヒチ ポリネシアの青い海と核実験の傷跡

根津真澄＋オット 56

世界のソーシャルアクション！

孔 栄鍾 60

韓国社会がたどった「不安」、そして「連帯」（韓国・前編）

JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合（61）

「真田理論」を学び感じたこと

62

私の履歴書 社会福祉経営全国会議（61）

豊かで安心できる社会に向けて

中西 純子 64

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（81）

水野阿修羅 66

育つ風景 四歳の劇ごっこ

清水 玲子 68

映画案内 『スタンド・バイ・ミー』

吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

生田 武志 72

大原孫三郎・總一郎、山川均・菊栄、石井十次

（その7・山川夫妻と活動家たちの男女関係）

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

冬のオリンピックで滑るのじゃ！

ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば

ありむら潜 76

★新連載★モトコの66歳えぶりでい

川口モトコ 77

みんなのポスト 50／福祉の動き 78／今月の本棚 81

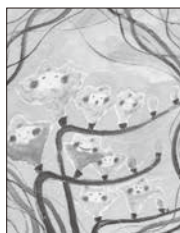
●グラビア● 自分のペースで、自分らしくいられる居場所を  
～たんぼぼ学童保育所～

## 福祉のひろば

2026年4月号

### ●表紙の絵●

神門やす子



# 海を守ることは、 人を守ること

プロダイバー・環境活動家 武本 匡弘

私の活動の原点は、海です。今から四〇数年前、沖縄で体験した「初めてのスキューバダイビング」が、私の人生を大きく変えました。海底一面にびっしりと広がる色とりどりの造礁サンゴ、優雅に乱舞する熱帯魚たち……。陸上には存在しないような鮮烈なトロピカルカラーに包まれた海中世界は、「感動」という二文字ではとても言い尽くせない体験でした。あの瞬間、海とともに生きていくことを心に決めました。

二八歳でダイビング専門会社を起業し、以来約四〇年、プロダイバーとして国内外のさまざまな海に潜ってきました。最初の二〇年間は、どこの海に潜っても生物多様性に富んだすばらしい海中を見ることができました。しかし、後半の二〇年間、状況は一変します。気候変動や地球温暖化の影響により、海洋環境は急速に悪化しました。

とくにサンゴの白化が地球規模で起こった一九九八年前後からは、白くなったサンゴがどんどんがれき化していく。かつて命に満ちていた海が、静かに、しかし確実に死に向かっていく姿を目の当たりにし、何もしないという選択は、私にはありませんでした。そして、環境NPO法人を立ち上げ、ダイビング会社の経営と環境保護活動の両立をめざしました。

けれども、海洋環境の悪化は止まりませんでした。「子どもたちの目の前から未来が消えていく」という強い危機感が募り、五八歳で経営者を退き、一人の環境活動家として歩む決断をしました。海を守ることは、自分の命を守ることと同じこと。それが私の環境活動の原動力です。

長年経営者として歩むなかで、私は「仕事をしているときこそ、人は輝く」と信じてきました。誰かの役に立とうとし、責任を引き受け、自分の力を発揮しようとしている姿には、その人の尊厳が宿ります。本来、仕事とは人を成長させる場です。仕事のなか



## たけもと まさひろ

プロダイバー・環境活動家・NPO法人気候危機対策ネットワーク代表。2015年より気候変動・海洋漂流ごみの探査等を目的に自ら操船する帆船探査航海を開始。2019年、ゼロ・ウェイスト、プラスチックフリーを目指す「エコストア パパラギ」を創設、現在は労働者協同組合として運営。全国各地で講演活動を行う。

で人格が磨かれ、仲間と支え合いながら自分の可能性を広げていく。そうあってほしいとずっと願ってきました。

しかし、現代社会では競争があたりまえとなり、一人ひとりの尊厳よりも効率や成果ばかりが求められています。そのなかで心を病み、身体を壊し、自信を失っていく人が少なくありません。だから私は、競争原理を会社を持ち込みませんでした。むしろ「いちばん仕事が遅いと言われる人」を基準にしくみを整えてきました。困難を抱える人に合わせるほうが、組織は結果的に強くなる。誰一人「ダメな人」をつくらないことが、私の経営の軸でした。

環境問題もまた、同じ構造をもっています。自然を壊す社会は、かならず弱い立場の人にしわ寄せがいきます。気候変動や災害はまず生活の困難として現れます。つまり、環境問題は人権の問題です。

とはいえ、私たちが特別なことをしなければなりません。マイボットルを持つこと、使い捨てを減らすこと、海に悪いものを流さないこと。小さな選択の積み重ねが、未来を変えることにつながります。環境問題へのとりくみはガマンや義務ではなく、前向きで希望ある行動なのです。

(聞き手 黄)

※次号から、武本さんによる新連載「海の現場から地球が見える」がはじまります。いま地球で何が起きているのか。気候危機と平和の危機が重なる時代に、私たちはどのような社会を選び取るのか。環境問題は、人権や福祉、そして「人を大切に作る社会」づくりと深くつながっています。持続可能で誰も取り残さない社会のあり方を、読者のみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

## 「ケアの倫理」の可能性

新年度、今年も福祉の仕事に魅力を感じて入職される新入職員さんがたくさんいること、そのみなさんが、さまざまな期待と不安のなかでも福祉の仕事にやりがいを感じ、つづけてくれることを願って、各分野・現場の先輩職員から、新入職員へのメッセージを寄せていただきました。

社会的養護を必要とする子どものために働きたい、一人ひとりの子どもの思いに寄り添いたい、目の前の人の笑顔のために働きたい、一人ひとりの利用者さんと深くかかわりたい、人を支える仕事がしたい、人とかかわる仕事をとおして自分自身も成長したい……今年は、入職三〜五年目の比較的経験年数の浅い、新入職員さんに近い立場のみなさんが、福祉の仕事に就いた理由や魅力を語ってくださいました。もちろん、現場では深刻な担い手不足とそれによるさまざまな悩みも抱えています。福祉の現場で奮闘する先輩職員のエールがあたらしく入職するみなさんに届き、みんなで仕事の魅力を確認する機会になればと思います。

いっぽうで、福祉の外の世界に目を向けると、アメリカとイスラエルによるイランへの攻撃で、三月六日現在、民間人一〇〇人以上が殺害されたと報道されています。イランは報復攻撃として、イスラエル

だけでなく中東周辺国のアメリカ関連施設への攻撃をはじめ、世界が戦争への歩みをすすめようとする危険な状況です。日々目の前の子ども、障害のある人、高齢者に向き合い、寄り添い、ゆたかな暮らしや発達を保障しようと奮闘している福祉現場、すべての人のいのちと人権を守る社会福祉の理念とは真逆の世界です。

だからこそ、福祉の仕事に就く私たちのなかでその魅力ややりがいを語り合うことも大切にしたいと同時に、私たちが大切に行っている価値観を社会に広げ、発信していくことの大切さもいっそう感じます。

昨年、「ケアの倫理」を見出したアメリカの心理学者、キャロル・ギリガンさんが、科学や思想・芸術分野の発展に寄与した人を顕彰する「京都賞」を受賞し、二〇二五年一月二〇日・二一日の『毎日新聞』でインタビューが紹介されています。記事のなかでギリガンさんは、「自らの主張を押し通すためなら、力を振りかざして相手を屈服させる」のが「家父長制」であり、まさにトランプ政権だと指摘するとともに、「ケアの倫理は、家父長制に抵抗する『解放の倫理』となる」と話されています。「ケアの倫理」とは、「個々の文脈に即して相手のニーズを敏感に受け止める声」です。まさに、今号の特集で先輩職員のみなさんが大事にしていると語ってくださったことです。

「ケアの倫理」の声を広げていくことが、いまいっそう求められています。いまの社会のなかでの社会福祉の位置と役割、そこで働く福祉労働者もつ可能性を、みなさんとともに考えたいと思います。

(編集主任) 申 佳弥